

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391000023		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム金山(南棟)		
所在地	岩手県陸前高田市竹駒町字相川73-30		
自己評価作成日	令和4年9月20日	評価結果市町村受理日	令和4年12月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム金山は、元はグループホームつばきとグループホームりんごが竹駒町で休止中だった施設(グループホーム金山・グループホーム竹の里)に、平成30年9月1日に引っ越し、2ユニットとして再開した施設である。介護老人保健施設松原苑、松原クリニック等とは距離的には離れてしまったが、法人としても入居者の状態変化、急変、災害時には各事業所への応援要請、連携を行い速やかに対応できる体制は継続されている。医療面では松原クリニックや訪問看護と連携し、看取りが可能な体制となっている。また、コロナウイルス感染のバックアップ体制も出来ている。老健と団体に職員は委員会活動しており、可能な限りいろいろな情報が入手でき、勉強会にも参加している。陸前高田の在宅医療を支える会等、外部の研修機会もコロナウイルス流行前は参加していた。月1回以上は季節に合ったイベント行事を開催している。閉じこもり予防や季節を感じられるように、頻回にドライブ等の外出(感染予防の為に外部との接触は避けて)をしている。庭には家庭菜園があり、そこで採れた新鮮な野菜を提供している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、高台にある集落の中心部に位置している。周辺には郵便局、消防の屯所、コンビニなどがあり、敷地内には、防災訓練の共同開催など、相互に支援、協力しあっている小規模多機能ホームがある。運営にあたっては、グループホームの基本理念や運営目標を職員間で共有し、お便りやお知らせにより利用者の様子を家族に知らせ、家族の利用者の要望や意向を伺っている。運営推進会議委員からのコロナ禍対策や防災訓練などの提案や助言を受け、運営に反映させているほか、職員からは入浴用品の購入や食材の確保、イベントの開催などの様々な提案を受け、施設設備の拡充、業務の改善に取り組んでいる。かかりつけ医による訪問診療や訪問看護師の派遣、協力医療機関による感染症の予防接種など、医療機関との連携により、利用者の体調や生活状況に応じた、迅速な医療対応ときめ細かな介護サービスを提供し、利用者の安心と家族の信頼を得ている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年10月21日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念をホーム内に掲示し目につくようにすることで、常にも実現するためにスタッフがどのように考え、行動すべきかを目的に示し実践している。グループホームの特性を活かし「施設」というよりは家庭に近い雰囲気の中でゆったり過ごせるように心がけている。	基本理念や運営目標を職員間で共有し、ケアの質の向上を図りながら、利用者の個性と残された能力を活かし、その人らしい楽しみを大切に、きめ細かな介護サービスを提供している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	コロナの影響もあり、例年行われている敬老会や夏祭り行事等、事業者内での小規模開催となっており地域の方々との関わりは制限せざるおえない状況。その中でも地域に根付けよう利用者が回覧板を近所に届けたり、近隣の運動会等の地域行事が開催されれば感染対応しながら見学に言ったり出来る範囲で交流に努めている。	感染症対策により、施設へのボランティアの受け入れなど制限しているが、散歩中に住民から声をかけていただいたり、小学校の運動会の見学や小学生の作品の事業所内展示、利用者作成の雑巾の提供と交流が続いている。また、町内会を通じた広報の入手など、地域との繋がりを大切にしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の報告書でホームでの取り組みや認知症の方の日常生活、認知症ケア等について報告している。また、グループホーム金山・小規模多機能ホーム玉山共に地域の何でも相談所という役割を持っていると地域に発信しており、相談も受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催予定していたが、コロナウィルス感染症予防の観点から、書類を通しての報告としている。運営推進委員とは文書での意見集約を行い、活用している。	集合しての会議開催は控え、書面での対応としている。運営推進会議の委員からのご意見は少なく、活動報告が主体となっているのが現状である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に1回の運営推進会議の報告書を市の担当者に提出している。極力、市のケアマネ会議や研修に参加し、情報交換を行っている。コロナウィルス流行前は陸前高田の在宅療養を支える会の中の劇団にも参加し、地域への医療・保健・福祉の啓蒙にも協力している。	行政情報は文書やメールで入手するほか、市主催の地域ケア会議に職員を派遣し、会議内容を職員に周知している。小規模多機能ホームに設置している情報端末から災害情報を入手しているほか、法人の居宅介護支援施設を通じ、市の情報を入手している。今はコロナ禍で見合わせてるが、陸前高田市の在宅医療を支える会(チーム気仙の和)の活動にも参加し、啓発普及のためのDVD作成にも携わっている。	

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。又、玄関の施錠もせず不穏な利用者が外出しようとした場合でも、否定せず傾聴や行動を共にし見守ることでその人を尊重している。夜間帯にはリスクの軽減を把握するためにセンサーを設置しているが、あくまで安全性を保つためであり、行動制限はせず動きの確認のために使用している。	医療法人の事務局が主体となり、組織的に会議開催や研修体制を組み、職員間で情報共有、伝達講習を行っている。身体拘束の事例はなく、玄関の施錠も夜間のみで、居室の窓の鍵も自由に開け閉めができる。居室での転倒予防や離床確認の赤外線センサーを6名使用している。スピーチロックについては、日常生活場面において職員間で配慮している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	法人の高田施設でも定期的に研修を行っている。また、法人としてeラーニングシステムを取り入れており、各職員で個別にも学習できる体制である。身体的、精神的、金銭的(家族に関わる)虐待にも注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人の高田施設でも定期的に研修を行っている。また、法人としてeラーニングシステムを取り入れており、各職員で個別にも学習できる体制である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に感染予防に配慮しながら(コロナ流行地からの家族は直前にPCR検査を受けてもらう)、なるべくホーム内の生活の様子を見学してもらう。申し込み相談や見学希望も増えている。契約時には十分な説明を行い、合わせてリスク説明も行っている。入居者、家族が納得した後で契約をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常的に入居者の話を傾聴し、希望や不満がないかを理解する様に努めている。家族が面会時には日々の様子を説明したり、毎月請求書と共に書面としても様子を伝えている。また、高田施設としても定期的に家族全員を対象としたアンケートを行う、ホーム玄関に意見箱を置く等、要望を聞き入れる体制を構築している。	年1回家族アンケートを実施しているほか、病院受診の付き添い時の聴き取り、毎月発行のおたより、居室担当の手づくりのお知らせにより、利用者の生活状況をお知らせし、こまめな電話連絡で家族とコミュニケーションを図っている。また、利用者から要望のある、お手伝いや趣味、誕生日の料理、買い物、ドライブなどに対応している。	

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のスタッフミーティングや連絡ノートを活用し、随時、意見や提案が出来る体制を作っている。本部から運営に関する話があったらその都度、伝えている。日常業務の中からも職員の意見を汲み取れる様な環境作りに努めている。	年2回の職員との面談や職員会議での発言、連絡ノートへの記載などから、職員の提案や要望を受け止めている。入浴備品の整備、入浴後の皮膚への塗布、食事の質とコスト、リハビリパンツから布パンツへの排泄用品の節約など、介護の充実や設備の整備のほか、労働条件や働きやすい環境の整備など、様々な場面で職員の意見や提案を運営や業務改善に取り入れている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	随時、統括部長・看護部長・介護部長に相談しており、職場環境を理解してもらっている。隣接している小規模多機能ホーム玉山の所長は介護部長であり、要望を伝えやすい環境下である。年2回人事考課を行い、個々の評価・意見集約を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在はコロナウイルス感染予防の為に法人外の研修は最小限にしている。法人としてe-ラーニングシステムを取り入れており、各職員で個別にも学習できる体制である。法人内研修は定期的開催されており、参加できるようにしている。月1回のスタッフミーティングの際に事業所内の勉強会も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルスの影響で機会は減ったが、流行前は県、ブロック定例会や各研修等に参加していた。その際に他ホームの職員との意見交換等を通じ、情報収集の場を設けサービスの向上につなげている。現在は陸前高田の在宅療養を支える会や認知症の人と家族の会等の研修に参加し、交流を図っている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設利用経験や担当居宅ケアマネがいれば事前に情報を収集しておく。その後、入居前の訪問、ホームの見学、サービス利用中の状況確認等を行い、不安に思っている事や要望等を傾聴し、安心して利用できるように対応している。		

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅での介護経験を聞き入れ、家族の不安・要望に傾聴し対応している。アセスメントを通じ、具体的なケア内容を提案する事もある。サービス開始後も毎月連絡表を送っている。面会の機会があれば本人の状況を報告、要望を傾聴し対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状況に応じて適切なサービスを検討し、本人・家族に説明し、承諾を得た段階で他施設の相談員と連携を取っている。その時々々の状態に合わせたサービスを提案し、本人・家族に選択してもらっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	アセスメントから、今までの生活歴、趣味を活かせるように場面に応じ、食事・おやつ作り、畑作業等を積極的に行っている。入居者と職員間で教え合い、意向を尊重した姿勢で関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人が過ごしやすい生活を送れるように協力を働きかけている。毎月、ホームでの生活の様子、健康状態、お小遣いの残高をお便りで報告している。体調の変化についても随時、報告と相談をしている。家族に、こちらから生活における相談や受診等の援助を求めた際、スピーディーに対応してくれている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍において外出や面会は制限されているが、精神面で切り離せない関係性の人は健康状態を確認の上、許可している。遠方から急遽の面会者も拒否することなく窓越しで対応している。利用者自身が大切にしていた人間関係が途切れないよう季節季節ではがきを出すなど支援に努めている。馴染みの床屋の携帯電話を活用して連絡を取り合っている入居者もいる。	家族の面会は、予防接種や検査の実施状況を確認した上で、15分以内で居室で対応している。遠方から突然の家族訪問の場合は、窓越での面会としている。知人、友人、近所の方も同様である。地域の伝統のお祭りの見学や地元のスパーへの買い物にも出かけている。馴染みの床屋に半数の利用者が出かけている。年賀状や暑中見舞いを出したり、前職の退職者会の名簿が届く利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常生活の生活の中でも、利用者同士の関係性を把握し、様々な作業やレクリエーション行って頂いている。若い頃に同じ職場、出身地域だった等の関係性を活かし、話題を提供している。北南棟の行き来もある等、ホーム内の環境にも配慮している。		

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設に入所・入院した利用者・家族の情報収集は行っており、その後の相談される事がある。亡くなった場合には管理者が家族の状況を収集し、必要に応じてメンタルケアや葬儀参列等のフォローをしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメント情報に基づいた希望、意向を考慮している。毎日本人に何をやりたいか確認し選択させることでスタッフの押し付けにならないよう対応している。困難な場合には生活歴や現状を把握した上で表情や態度などの反応を大切に無理なく援助している。	職員からの問いかけに応じてくれる利用者が多く、好みの食事への希望がよく出る。誕生日に当事者のリクエストを叶え寿司、ウナギ、ウニ、サンマなど生もの等にも対応している。なお、生ものに関してはスーパーで購入したものを提供している。裁縫、習字、写経、大正琴、おやつづくり、畑仕事など利用者の得意分野を後押ししている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常生活の生活の中でも、利用者同士の関係性を把握し、様々な作業やレクリエーション行って頂いている。若い頃に同じ職場、出身地域だった等の関係性を活かし、話題を提供している。北南棟の行き来もある等、ホーム内の環境にも配慮している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの1日の過ごし方を見守ったり見極めたりすることで、心身の状態変化にすぐ対応できるよう努めている。職員間の申し送りの体制も出来ており、隙間なくケアを努めている。状況によっては医療側(主治医や訪問看護)に相談している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	個別では定期的にケアプランを評価し内容を共有している。1ヶ月に1度利用者の状態を家族にお便りで報告している。電話や来苑時に直接家族の希望を聞き、ケアプランに反映させている。又、スタッフミーティングでは計画通りに行えているか、状態に変化はないか意見を述べ合い再確認している。変化があったりアイデアがあった際は随時計画の見直しをするように取り組んでいる。必要に応じて多職種との連携も行っている。	計画の見直しは3か月ごとに行っている。居室担当者がアセスメントを行って原案を作成し、担当職員とケアマネが検討、修正、作成したものを職員会議によるカンファレンスを経て、全職員で周知している。家族への同意は居室担当者が行い、必要時、主治医や訪問看護事業所との調整等を図っている。投薬の変更などの医師の指示や看護師の助言なども計画に反映させている。	

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の利用者の様子をケース記録として残している。日々の様子の要点をまとめた申し送り表も活用している。利用者が発言した言葉や表情、行動から気づきや工夫をくみ取り介護計画の見直しに活かしている。健康管理や医療側(訪問看護)との関わりは健康管理記録票を活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時に生まれるニーズに関しては必要に応じ家族に報告、相談する。状況に応じた支援を提供できるようにフォーマル・インフォーマルサービスを調整している。特に医療面でのケア(主治医や訪問看護との連携)については、柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウイルス流行前より地域との関りは減っているが、その代わりに、施設内での役割を重視している。近所に散歩や回覧板配り、近くの商店での買い物棟を行っている。知人と電話での関りや、希望があればリモート面会の設備もある。ハード面の震災復興の様子を感じてもらうために、ドライブを積極的に行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医をそのまま継続し受診して頂いている。希望があれば、松原クリニックに、切れ目がない様に変更している。家族が看取りを希望された時にも松原クリニックの協力に対応する体制は出来ている。家族が付き添う際には、本人の状態の報告や連絡が必要な際は書面にて伝達し関係を保っている。	利用者の半数が協力医療機関のクリニックを主治医としている。クリニックの医師は、感染リスク及び受診負担軽減のため事業所に出向いて診察してくれている。通院は原則家族対応としているが、家族の対応が難しい時には職員が付き添っている。受診時には、家族に關係資料を託しているほか、受診後には聴き取りを行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回訪問看護による健康チェックが行われており、状態の報告・相談を管理記録に記載して伝達している。それによって職員全員が共有できている。また、随時、体調の変化には訪問看護に相談し、来苑して見てもらっている。		

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院設備のある県立高田病院と県立大船渡病院では医療連携パスという様式を使用している。入院時には1週間以内に記入し病院に提出し、退院時に病院側よりもらう流れとなっている。現在はコロナウィルス感染予防の為に直接の面会は出来ない場合が多いが、その際は医師や看護師、相談員と情報共有出来る体制としている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の状態に変化が見られた際は、家族に今後の方針について説明を行う事としている。希望によっては松原苑や松原クリニックと連携していく体制となっている。事業所内においては、看取りに関するマニュアルを作成し各部署との連携を図りながらチームとして支援している。	看取りの実績は5年ほど前までであった。指針やマニュアルも整備し、利用者や家族には終末期までの対応が可能な旨を説明している。家族付き添い用の部屋を確保し、法人運営の医療機関、訪問看護ステーションなどとの連携も整っている。重度化した場合は、改めて家族の意向を確認し、他の医療機関への移送、施設内での看取りを行うこととしている。	新任者、未経験者を対象とした看取り対応と事後のケアを含めた研修の実施など、職員のスキルアップと体制の拡充を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員はAED、心肺蘇生法の講習を受け、応急手当や初期対応の仕方を訓練している。AEDは同一敷地内にある小規模多機能ホーム玉山に設置してある。緊急時の対応マニュアル等を活用して職員間で再確認を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行い避難できる方法を身につけている。時には抜き打ちで訓練を行うことでスタッフへの心構えを再確認している。避難する際の必要物品や食料も備蓄しており避難場所も確立されている。法人としてもモバイル通信が発信され応援できる体制もできている。ホーム内には回転灯があり地域に知らせる対策もとっている。行政から「避難指示」が発令された際には旧GHつばき・りんごに避難する事としている。	防災訓練は、年2回実施し、1回は夜間想定訓練を実施した。コロナ禍のため、消防署や地域住民の参加までは求めなかった。ハザードマップ上で、一部土砂災害の地域となっている。避難は「旧グループホームつばき」を想定している。食材の備蓄や発電機を確保している。食料を備蓄し、敷地内には法人設置の大型の常設の発電機を設置している。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の情報を共有した上で会話や容姿などプライバシーに気を付け対応している。声掛けの際は近くに歩み寄り視線を合わせたり、ボディータッチをすることで安心感を与え支援している。入浴や排せつなど身体ケアでは他の利用者の目に触れないように支援したり、同性職員が対応したりしている。	入居前の生活様式や前歴など、利用者の大切なものなど、個性を尊重し、利用者の心情に配慮した介護を行っている。個人情報、利用者ごとにファイルし、事務室で保管している。バイタルチェック表などは、パソコンに記録し、パスワードで管理している。利用者個人を尊重し自尊心を傷つけることがないように職員は日頃から配慮している。入浴や排泄介助の際は利用者の意思等確認し、希望に沿い同性としている。	
----	------	--	--	---	--

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中でも利用者の思いや希望を傾聴し、気付けるよう努めている。変化があれば、職員間での情報共有を図り対応している。自己決定が出来る様に支援しつつ、難しい場合は選択肢の中から選んでもら得る様な対応を心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先ではなく、入居者優先と考え一人ひとりのペースを大切に、入居者の訴えを傾聴し、可能な限り希望に沿った支援をしている。例えば午前中のお茶時間に「今日は何がしたいか？」と聞いたり、朝が苦手な朝食が遅くなりがちな人でも、急かさずにその人のペースに合わせている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々に合わせたおしゃれ、身だしなみにお化粧品道具を準備したりしている。衣類も一緒に選んだりして、本人の着たいものや季節感に合ったものを着て頂いている。コロナウィルス感染予防しながら、入居者・職員と一緒に買い物に行き、好きな服を買う時もある。行事の際には皆で浴衣等を着て楽しんでもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人のできる作業を把握し、野菜の切り方、片付け等に参加してもらう。定期的に得意なお菓子作りをして頂いている。会話の中から好みの食べ物を聞き出しメニューに入れる。チラシを見てもらい、希望を聞いてその日に購入・提供する事もある。誕生日には本人の好きなメニューを提供している。季節ものやお楽しみメニューも取り入れている。	食材は2日ごとに地元のスーパーで購入している。調理は、利用者もお手伝いしながら担当者が行っている。ホットケーキ、ダンゴ、ガンツキなど、利用者の希望に沿ったおやつを利用者と一緒で作っている。季節や行事に合わせて、にしめ、チラシ、柏餅のほか、牡蠣、ホヤ、誕生日には寿司、サシミなども提供している。ドライブの際にはソフトクリームを食べ、室内での流しソーメン、前庭での焼き秋刀魚、いものこ汁も食事を楽しみなものにしてくれる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態に応じ、食事量、水分量を把握し、メニューに栄養の偏りのないようバランスのとれた食事を提供出来る様に努めている。同法人内の老健の管理栄養士に献立を出し、栄養のバランスを確認して頂いている。また毎月測定した体重を報告している。		

令和 4 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の有する能力を生かしながら、毎食後、口腔ケアを行っている。夕食後には義歯洗浄を行っている。老健の歯科衛生士に随時相談をしたり、週一回松原苑に協力歯科医が来るので、必要に応じ相談・治療をしてもらう体制となっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し排泄パターンを確認している。排泄で失敗する利用者もいるが自尊心、羞恥心を考慮するように心がけている。尿意便意が曖昧な方にはなるべく便座に座ってトイレで排泄するという意識を持ってもらう様に支援している。その都度、身体面・認知面を考慮し、利用者に応じた排泄ケアを相談しながらケアしている。	排泄チェック表により、動向を把握し、案内、誘導しているが、半数は声かけなしでトイレに行っている。利用者の状況により、見守り、ズボンの上げ下げなどを介助している。布パンツの使用は半数程度で、パットの併用は5、6名である。他はリハビリパンツ、パットを併用している。失敗した場合は、利用者の心情に配慮し、清拭、シャワーで対処している。夜間のホータブルトイレ使用者は2名で、センサーマット設置者もいるが、あくまで安全確認に留めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の牛乳の提供、食物繊維の多い食材を取り入れた献立の工夫をし、体操や散歩等、体を動かす時間を設けている。便秘症気味の方には、日頃からの運動やマッサージや市販の飲料品(センナ茶)で対応している。医師の指示で下剤をしている利用者もいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回を基本に入浴してもらっている。体調や気持ちなどを考慮しながら対応している。男性職員の介助に嫌悪感を持つ利用者には女性職員で対応している。リラックスと乾燥肌予防の為に浴用化粧品を使用し、介助と同時に皮膚状態の観察もしている。家庭浴槽での入浴が困難な場合は特殊浴槽を準備している。	週2回、日曜を除く毎日、2~4名入浴している。入浴剤はバスクリン、保湿剤などのほか、季節で菖蒲湯、ゆず湯を提供している。入浴時は歌を唄ったり、世間話をしたり、利用者と職員のコミュニケーションの機会にもなっている。同性介助とし、皮膚観察を行うが見守り程度としている。皮膚の弱い利用者には、特に配慮し、入浴後はクリームなどを塗布している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	畳やソファ等、いつでも自由にくつろげるスペースを設けている。個々の体力を考慮し日中昼寝を促している。気温については各部屋にエアコンを設置しており、その人の体質(寒がり・暑がり)に合わせている。掛け物調整や湯たんぽ、電気毛布等の活用もしている。香りの配慮し、芳香剤や天然のラベンダーを置いている利用者もいる。		

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後の処方薬の確認、申し送りにて職員間で共有し、把握に努めている。特に、新たな処方があった場合は注意している。また、情報をまとめたファイルを活用いつでも閲覧出来る様になっている。内服薬が多い利用者は薬局にて一包化の協力を得ている。訪問看護とも健康管理記録表を活用し共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴の中から出来ることや得意なことを把握し、それを基に日常生活の中で役割(家事全般、畑仕事、生け花、習字等)を支援している。家族への贈り物や展示物を作る等の目標を立てて活動することもある。その日に何をやりたいかを聞きながら、日常のマナー化をしないことを目指している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウィルスの流行前は頻回に外出していた。現在は感染予防の為に、客が少ない時間帯に買い物を行ったり、貸し切りに出来る環境(舟下り等)で計画しながら、徐々に外出のイベントを増やしている。季節を感じて頂くための外出や日常的なドライブも積極的に行っている。新聞やテレビを見て急遽ドライブに行くことも多い。外泊は感染予防の為に行ってないが、面会は制限付きで行っている。	コロナ禍ではあるが、外出は感染予防、健康状態等に配慮しドライブ、散歩、ベンチでお茶会、買い物にでかけている。年間計画や月計画もあるが、ドライブは30分~1時間程度の行程で、10人乗りのボックスカーや小型乗用車などで牧場、道の駅等、ニュースや新聞で季節情報を得て出かけることもあり利用者から好評である。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の能力に応じ、管理方法を変えている。施設管理の小遣いの他に少額を自己管理してもらっている利用者もいる。コロナウィルス感染予防しながら、入居者・職員と一緒に買い物に行ったり、欲しい物を傾聴して、職員が購入することもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人と家族の絆を大切にしながら、情報を得ることにより、本人が過ごしやすい生活を送れるよう働きかけている。本人から要求あった際は電話を取り次ぎ、いつでもお話できるように支援している。こちらから暑中見舞いや年賀状を出したり、家族から手紙を頂く事もある。携帯電話を活用する利用者もいる。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせた作品を利用者に作ってもらい展示している。七夕やお雛様、正月飾りなど季節ごとに飾っている。毎月、撮影した写真を廊下に展示し眺めてもらっている。懐かしいと感じられる様な歌を流し、合唱していることもある。ホールはコロナウィルス感染予防の為に換気を取り入れながら室温調整している。トイレには清潔感や安心感を引き出す芳香剤を使用し、居心地の良い場所と認識してもらえる様に配慮している。	淡い色調のツートンカラーの室内は、大型の引き戸と天窓からの光で明るく、壁にはドライブでの写真や、小学生の作品、ハロウィンなどの季節の作品が飾られている。家族からの提供の花が生けられ、鉢物にも花が咲いている。利用者は、食卓用テーブル、ソファなどで、テレビを観たり視聴、趣味、レクリエーションを行うなど、思い思いの場所で寛いでいる。温度等は、エアコン、FFのストーブ、加湿器、空気清浄機などで、適正に管理され、快適な環境となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	サンルームや廊下にイスを置いたり庭にベンチを置き、思い思いに過ごせるような居場所を確保している。また、就寝時間は特に決めておらず、ゆっくりテレビや新聞を見て過ごす利用者もいる。その際には希望によりおかしや飲み物を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に家で使用されていた馴染みの家具を持って来てもらい、自宅にいた時の部屋に近づけることで、安心して生活できる環境にしている。家族写真や作品、賞状等を居室に飾っている。仏壇を持って来て、毎日、お茶を供えている利用者や、以前仕事で使っていたミシンを部屋に置いている利用者もいる。	ベッド、カーテン、洗面台が取り付けられている。利用者は、チェスト、イス、洋服掛け、ラジオ、仏壇、ミシン、家族写真などを持ち込み、利用者の意向に沿った配置としている。大型の窓で明るく、温度はエアコンで管理され、居心地のよい居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は段差のない環境となっている。各居室、トイレ等のプレートを目線に整備し、安全に配慮しながら出来る事を考慮している。不備があればすぐ点検、整備を行っている。ADLにより福祉用具も随時、準備出来る体制としている。		